着任のごあいさつ　～千廣さんの宿題～

林産試験場長　岩田 聡

4月の人事異動により，北見にあるオホーツク東部森林室から林産試験場にまいりました。どうぞよろしくお願いします。

林産試験場の勤務は今回が2度目で，前回は2002年（H14）から2004（H16）までの3年間，当時の企画指導部の普及係長として勤務しました。それから20年近くが経過し，そのあいだに道立であった試験場は地方独立行政法人に移行したので，試験研究を取り巻く環境はずいぶん変化していると思います。

普及係長として勤務した林産試験場時代，普及課の果たす役割が話題になり，西神楽に移転する前の林産試験場長であった千廣俊幸さんの「林産試験場職員としての1,100日」（林産試だより1983（S58）年7月号）という記事を上司から紹介されました。

これは林産試験場に対して書かれたものですが，自分が林産試験場をはなれ，担当する業務とは関係ないにもかかわらず，ずっと持ち歩き，思い出しては読み返すものになっていました。

その書き出しは，「残雪が庭にいくらか，きびしい冬のなごりのようにあった近文の公宅におちついたのは，3年前の4月19日であった。」と千廣さん特有の味わいのある文章からはじまります。自分の頭には「4月の残雪の近文」というイメージが相当刷りこまれ，今回の異動でもたまたま近文に引っ越し，変わらず雪の残る近文に「やっぱりあったな」と思ったところです。この記事に惹かれるのは，行政としても意識すべきこと，スピード感をもつこと，苦難があっても前を向いて進むことが書かれているからかもしれません。冒頭，千廣さんは「まず気がついたこと」として3つ指摘します。

・成果がこんなに集積されながらなぜ企業に有効にいかされていないのか
・ひとつのテーマにあまりにも時間がかかりすぎている
・相当に先をよんだシーズ研究に類するものの集積が思ったより少ない

今，また読み返し，40年前に書かれている課題が現実として近文の残雪のように依然として横たわっているのではないかとギクッとしました。研究成果と実用化の間には深い谷があるといいますので，確かにそういう面もあると思います。

しかし，40年以上さぼっていたわけではないので，試験場の成果は目立たないだけであって時代の変化になんとか対応していると考えるのは自己弁護でしょうか。ただ，時代を先取りして将来の北海道を創るための先手をうった研究とまではいってないかもしれません。新年度を迎えた今年4月1日，道総研の田中理事長から，「組織は常に『健全な危機意識・危機感』を持ち，変化をチャンスと捉え，戦略的に対応することが大事」とあいさつがありました。これは，現実の社会は常に変化しつづけており，試験研究機関もその変化の後追いではなく先取りをしようというかけ声と受け止めました。

では，時代を先取りして将来の北海道を創るための研究を進めるにはどうすればよいのか。未来を予想するのはなかなか難しく，正直，正解はわかりません。この将来をさぐる手立ての一つとして，現場をもつ企業のみなさんとつながることではないかと考えます。林業・木材産業をはじめ企業等のみなさんがどう展開しようとしているか，企業のみなさんのもつ世の中の動向やちょっとしたアイデアから，自分たちのもつ能力とこれまでの研究成果を踏まえて，次の課題を設定していく作業を積み重ねること。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から直接の情報交換が貴重となってきています。それでも機会をつくりながら，自分を含め林産試験場職員それぞれが，現場をもつ皆さんとつながっていきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。